

太閤の城と石垣

ー JR 桃山駅前 の調査成果から ー

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 天下人となった豊臣秀吉は、文禄元年(1592)、伏見の指月の地に隠居屋敷を建てますが、2年後には城郭へと改められます。これが指月伏見城と呼ばれる城になります。さらに2年後の文禄5年(1596)、大地震によって指月伏見城が倒壊したことから、秀吉は指月伏見城があった場所からさらに北東の木幡山(伏見山)に城を再建します。指月伏見城があった場所は、大名の屋敷地となりました。築城わずか2年で廃絶した指月伏見城は、長らく謎に包まれていましたが、近年の発掘調査により、その様相が徐々に明らかになりつつあります。

発見された石垣 2021年秋、JR桃山駅前の発掘調査で、指月伏見城のものと考えられる石垣基礎部が発見されました。検出長は東西に18mで、石垣本体は残っておらず、基礎部のみが残っていました(写真1・図1)。方位は北に対して反時計回りに約18度振っています。地面を溝状に掘り込んで、根石を据え、裏側に安定性・透水性を高めるための栗石を入れ、前面に土を入れて叩き締めています(図3)。このような入念な基礎部の工法は安土桃山時代では他に例を見ません。

今回の発掘調査では、指月伏見城の石垣のほかに、木幡山伏見城



写真1 発見された指月伏見城の石垣の基礎部。奥には大名屋敷の石垣(東から)

期の大名屋敷の西辺を区画する石垣も発見されました。江戸時代に描かれた『伏見御城榎并屋敷取之

絵図』によると、調査地は紀州藩や広島藩の藩主を務めた浅野但馬守(浅野長晟^{ながあきら})の屋敷地に該当し

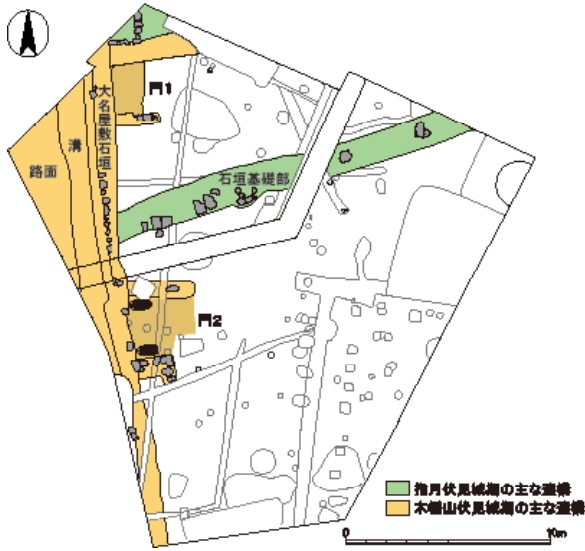


図1 調査区平面図

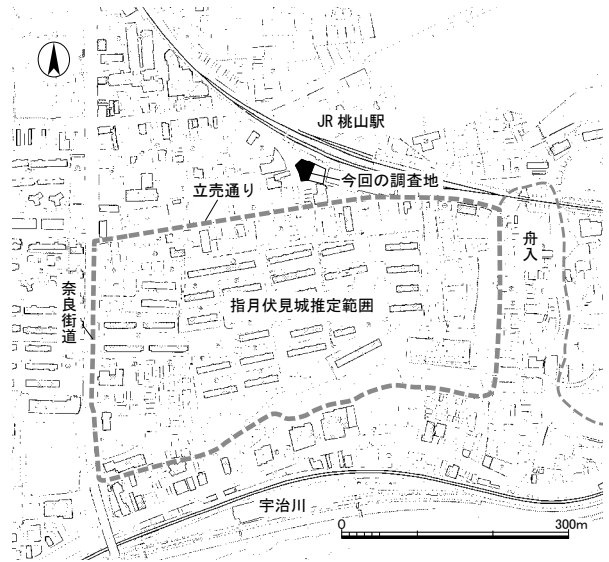


図2 指月伏見城推定範囲と今回の調査地

ます。大名屋敷の石垣は南北方向に築かれており、指月伏見城の石垣基礎部とは直交しません。施工の方位が異なっています。さらに、大名屋敷の石垣が指月伏見城の石垣の一部を壊して構築されていることから、2つの石垣に時期差があることは確実です。

『義演准后日記』には、大地震によって指月伏見城の御殿や門が倒壊したが、翌日には、秀吉が木幡山に城郭を再建する縄張りを命じていたことが記されています。合わせて城下の整備が進められ、調査地でも大名屋敷地に造り替えるときに新しい町割の方位に改められたと考えられます。残された指月伏見城の石垣の溝を埋めた土からは金箔瓦が13点出土しました

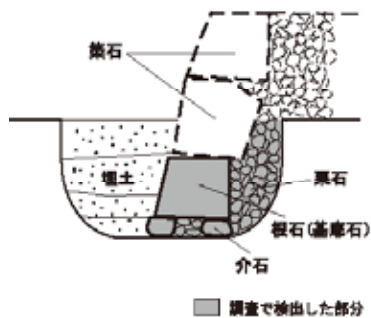


図3 石垣基礎模式図

(写真2)。この時に石垣の石材も抜き取られたのでしょうか。

指月伏見城の範囲 これまで指月伏見城の範囲は発掘調査や研究から、東側を舟入、南側を宇治川、西側を奈良街道（現在の国道24号線）、北側を立売通りで区画された南北約350m、東西約500mであったと推定されています（図2）。今回調査した場所は、推定範囲より北側に位置しています。同時期の石垣には類例を見ない技術で入念に石垣を築いていることから、大名屋敷というよりも、指月伏見城

にともなう石垣である可能性が考えられます。今回の発掘調査によって、指月伏見城の範囲が推定範囲より北側に広がる可能性が高くなりました。

おわりに 指月伏見城の内部には、天守や門、風呂などがあったことが、『義演准后日記』などから明らかになっていますが、建物の配置など、考古学的にはまだまだわからないことが山積みです。今回の発見が指月伏見城の実態に迫る足掛かりになると考えています。

(渡邊 都季哉)



写真2 石垣を埋めた土からは金箔を貼った瓦が出土した